Mk.14:32-42　「イエスの弱さ」

◎「アッバ、父よ」と祈る

本日与えられました聖書の箇所は「ゲッセマネの祈り」と呼ばれる箇所です。イエスが十字架に付けられる少し前、自分の死を目の前にしたイエスが神に祈りを捧げたという場面です。少し後のページでは「十字架につけられる」と言う場面が出てきます。このあたりに描かれているイエスの姿というのは、決して「完璧で強い神の子」の姿ではありません。そこにあるのは、恐怖に襲われ、34 節「私は死ぬばかりに悲しい」と弱音を吐き、地面に伏して震えている一人の哀れな人間の姿です。そしてこのように祈りました。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください」。「この杯」というのは、この後に受ける苦しみ、つまり十字架での死のことを指しています。そして「アッバ」という言葉。ここでイエスは、神さまのことを「アッバ、父よ」と呼びました。この「アッバ」というのは、イエスの母語のアラム語で父親を指す言葉です。それも、小さい子が親しみを込めて父親を呼ぶ言葉、つまり日本語に訳すなら「パパ」とか「お父ちゃん」というような言葉になります。これはまさに子どもが親を呼ぶ時の、甘えと信頼の入り混じった言葉なのです。

我が家では、2 歳の子どもが不安なとき、必死な顔で「ママ！」と泣きついてきます。あるいは夫のことを「トト！」と呼んで抱っこを求めに行きます。イエスがしたこの祈りには、まさに「怖い！助けてほしい！」と泣きつくような姿が滲み出ているのです。なりふり構わず、かっこいい姿でもなく、ただ親にすがる子どものように「死にたくない、怖い、この苦しみをできれば遠ざけて欲しい」と叫んでいる。この「かっこ悪さ」「弱さ」さにこそ、イエスさまが、私たちと同じ痛みを持つ「人間」になってくださった証を私は感じるのです。

◎人の痛みを知るには

なぜイエス・キリストは、こんなにも弱くなければならなかったのでしょうか。なぜこんなにも傷つかなければならなかったのでしょうか。もしイエスが、どんな苦しみも平気で乗り越える力強い方だったら、どうでしょうか。心強いですよね。信頼はおけますよね。立派だと思います。しかしそれでは、私たちを本当の孤独や悲しみから救い出すことはできません。なぜなら、 本当の苦しみを味わったイエスだからこそ、私たちが苦しい時に「その気持ち、わかるよ」と隣に座ってくださる。自分自身が傷を負い、心も体もボロボロになった経験がなければ、他人の重荷を本当に一緒に背負うことなんてできません。

例えば、私の息子が小さい頃のことです。赤ちゃんの頃は、私の足にアザがあると、「これ何だろう？」という顔をして触ってきました。痛いということがどういうことなのかよく分かっていないので、興味を持って触ってみるのです。2 歳になったばかりの頃、私はちょうど今年の 4 月に自転車を買ったのですが、自転車で転んでまた足にアザ

ができました。成長した息子は、アザを見て「イヤ」と言いました。痛いものだということが分かったのです。それで、見ていて気分の良いものではない、痛々しいからイヤだと言ったのだと思います。なぜ痛いということが分かったのか。それは、息子自身も、たくさん歩けるようになって、たくさん転んで、痛い思いをするという経験を積み重ねたからです。「痛い」ということの意味が分かるようになったわけです。そして最近、彼はもうすぐ２歳半になりますが、私が「今日はママ頭が痛いから優しくしてね」と言うと頭をなでなでしてくれるようになりました。私が、彼が怪我をするたびになでなでしてきたから、それを覚えていて、真似しているのです。自分の痛みだけではなく、相手が痛いんだということを想像できるようになったのです。そして、やがて、人の痛みに寄り添うことができるようになるのです。人の痛みというのは、同じ痛みを経験した人にしか、分からないということです。

もう一つ、個人的な話ですが、今年のはじめ頃、伝道師として教会で働いている、大学の後輩から突然連絡が来ました。「もうしんどいです」と。話を聞いてみると、「朝起きて、体が動かなかった」と。私は分かるよ、分かるよ、と話を聞きました。私自身も同じ経験をしていたから、その後輩の状況が痛いほど鮮明に想像できてしまうのです。以前もお話ししたことがありますが、私は新卒で赴任した教会で、うつ病になりました。今から７年前のことです。大きい教会だったため激務に追われ、また、教会の中に住み込みだったためプライベートがなく、脳が休まる空間がなくなってしまい、精神的に崩壊してしまったのです。今は休養して元気になりまして、実はつい先月、病院で寛解したと言われました。この７年間、なぜ自分が鬱でこんなに苦しまなければならなかったのかと考えました。そしてつい最近、これじゃないかなという私なりの答えが出ました。私と同じように精神を病んだ友達に寄り添うため、というのが私の中での答えです。その友達は、私が牧師であり、そして私が鬱になったことを知っていたから真っ先に私に連絡してきてくれたのだと思います。鬱は、私にとってとても嫌な病気でしたが、私がこの子の話を聞くことができるようになるために、この痛みに少しでも寄り添えるようにと、神さまが私に与えた試練だったのかなあと思ったのです。自分が経験した痛みだから、相手の痛みが、痛いほどによく分かるのです。これが、寄り添うということなのではないかと思うのです。

別の言葉に言い換えると、「憐れみ」と言うこともできます。新約聖書に出てくる「憐れみ」という言葉は、「腑(はらわた)を痛める」とも翻訳できる言葉が使われています。有名な箇所だと、良いサマリア人のたとえです。追い剥ぎに襲われた人、服を剥ぎ取られて殴られて裸で道端に倒れていた人を見て、サマリア人は「憐れに思った」と書いてあります。サマリア人は、まるで自分の内臓が痛むかのように、その人の痛みを感じたのです。私たちもこの「憐れむ」という言葉を使います。「主よ、憐んでください」と祈りを捧げます。これは、神さま私たちの痛みに寄り添い、私たちの痛みを一緒に味わって下さいという祈りです。

イエスさまは究極の痛みを味わいました。その痛い、苦しい、という経験を通して私たちの痛みを想像できるようになったのです。寄り添うことができるようになったのです。一緒に、痛いよね、苦しいよねと私たちの痛みを共に味わい、苦しむために、主は

苦しみを受けられました。

◎イエスの痛みと孤独

イエスの痛みは、体の痛みだけではありませんでした。心の痛みもイエスを襲いました。祈るイエスのそばで、弟子たちは眠りこけていたと描かれています。イエスが必死に祈っているのに、自分の眠気に勝てない。イエスからしてみたら、自分がどれだけ苦しい思いをしているかを弟子たちに理解してもらえない。誰も寄り添ってくれない。イエスはそんな孤独を味わっていたのです。イエスはなぜ弟子たちを連れてきたのでしょうか。おそらく、祈る姿を見守って欲しかったのではないかとおもうのです。そして祈りを共にして欲しかった。一緒にアーメンと、この祈りの通りになりますようにと言って欲しかったのです。イエスは心細かったのです。「ひどく眠かったのである」と書かれています。眠かったから、眠ってしまった。そんな弟子の姿というのは、そのまま私自身の信仰の姿に重なるように思います。イエスさまを大切に思っているけど、常に必死ではいられない。自分のことで精一杯になってしまう。神さまのことを忘れて自分のことばかりを大切にしてしまう。そう考えると、イエスを孤独に追いやって苦しめたのは、この私自身なんだなと感じるのです。

カール・バルトというスイスの神学者が、説教の中でこのように語っています。「ある人は、哲学者ソクラテスのように、恐れることなく毒を飲み死んだ。そのようにイエス・キリストよりも立派な死を遂げた賢人もいる。そういう人々に比べて、キリストはいささか弱く、臆病に過ぎるのではないだろうかと言う。否、全然違うのだ。不安についていえば、主イエスがこの時感じた不安は、主イエスが語られた言葉から推測するよりもずっとひどかったのだ。それは言語を絶するものであった。他の人間はそれに耐え抜くことはなかったし、想像もできないものであったのである。いかなる人間もこれほどに打ちひしがれたことはなく、これほどに戦慄し、恐れたことはなかった。我々が不安を感じる時、あるいは他の人々の不安を考える時、主イエスの不安はそれよりも大きく、同じ不安が無限に続いたのだ。なぜかと言うと、彼の目の前にあったもの。それは、全人類がもっている、嘘と不正の海であり、我々はそのごく小さな一部を見ているだけだが、主はこの時その全部をみていたからであると。そしてそこにおいて神の怒りと、永遠の滅びを感じていたのだ。全人類の罪を負い、大罪人として神の御前に立ち、人間が負うべき罰を担う。このことが主イエスの目の前にあったがゆえに、それゆえに彼は戦慄したのだ」。

イエス・キリストの受難、苦しみとは十字架で殺されることだけを指しているのではありません。ゲッセマネでこのお祈りをした時、すでに始まっていたのです。イエスさまが苦しみ抜いた十字架への道というものは、本来は、私たち人間が罪人として歩まなければならないものだったわけです。しかしその苦しみを全て負って、主イエスがその身代わりとして負ってくださった道なのです。

その後、弟子の一人であるユダに裏切られ、逮捕されます。ユダだけが裏切り者として有名ですが、裏切ったのはユダだけではありません。その後ペトロもイエスなんて人は知らないと言います。他の弟子たちもみんな逃げていきました。これまで共に過ごして

きた弟子たちが、イエスが信頼をおいていた人たちが、誰一人として一緒にいてくれない、寄り添ってくれない、その孤独はいかほどであったかと思うのです。そして、神を冒涜したとして侮辱を受け、殴られ、唾を吐きかけられる。その先にあったのが、十字架での死です。

◎十字架の死

イエスは最後に「御心に適うことが行われますように」と祈り、十字架へと向かわれました。十字架の死とは、究極の孤独です。その孤独こそが、私たちに希望を与えるのです。私たちがどんなにみじめで、誰からも見捨てられたと感じる時でも、「そこにはもう、先にイエスさまがいてくださる」という希望に繋がるのです。受難の道を歩み始めたイエス・キリストの姿、傷つけられ見捨てられ弱く弱くされた、その弱さのなかにこそ、私たちは救いを見出すのです。十字架で命を捧げたのは、私たちの弱さも、眠ってしまうような情けなさも、すべてを背負って死んでいったのです。

誰も一緒に祈ってくれなかった。そんな孤独を経験したイエスさまだからこそ、私たちの祈りに耳を傾けてくださるのです。

私たちの主イエス・キリストがいかに弱くあったかということを心に留めたいと思います。その弱さのゆえに、私たちに与えられた救いという恵みがあるのです。どんなに苦しい時も、その苦しみをイエスさまは共に味わってくださる。共に苦しんでくださる。その痛みに寄り添ってくださる。それが、イエスの弱さによって私たちに与えられた恵みなのです。ただこの私のために、イエスが傷ついてくださったということそのことを心に留めて歩む者でありたいと思います。